

賀茂県主族の伝説

梅辻 諄

(どこのお家でも祖父や父が子や孫に、一族や家の歴史と言伝えを語り聞かせるであろう。これは我が家の教育用に書いた昔語りの原稿である。学問的に推敲したわけではないので、独断と偏見に満ちているかもしれないが、ご参考までに投稿する。)

われわれ賀茂族(山城賀茂族)の先祖がどこからこの賀茂の地へやって来たのか、あるいはずっと大昔(縄文・弥生時代)からここに住み続けてきたのか、詳しいことは判らない。そんな古い事を証拠立てる確かな資料はどこにも無いからである。しかし、断片的な文章はいくつか残っているのです、それを紹介しよう。

その一 (A)

最も古い賀茂族についての文献と云われるのは、奈良時代の和銅六年(七一三年)に書かれた「山城国風土記」の逸文(一部だけ残っている文章)である。それには次のような内容が書かれている。

『賀茂の神と云うのはもともと日向国(宮崎県)の曾の峰(高千穂の

峰)に降臨(天から降りてきた)した賀茂建角身命と云う神であった。ところが神武天皇が日向から大和(奈良県)へ侵攻したとき、この神はその先頭に立って進み、大和の葛木(葛城)山へ移った。そこからまた、山代(山城)の国の岡田の賀茂へ行き、さらに葛野川(桂川)と賀茂河の出合う所へ移り、そこから上流の方を見て「狭く小さい川ではあるが石川の清川である」と言われた。それでその川を石川の「瀬見の小川」と云う。そこからさらに遡って「久我の国の北の山基」に鎮まり、現在の賀茂に定着した』。

その一 (B)

また『日本書紀』神武天皇即位前記には次のように書かれている(宇治谷孟訳)。

『神武天皇は軍を率いて九州の宮崎付近から出発して、方々で戦いながら、漸く和歌山県から奈良へ侵入しようとした。しかし、山の中は険しくて行くべき道もなかった。進むことも退くこともできずに迷っているときに、夜にまた夢を見た。その中で、天照大神が神武天皇に教えて云われるのに「私はいま八咫鳥を遣わすから、これを案内にせよ」と。はたして八咫鳥が大空から飛び降りてきた。天皇が云われるには「この鳥がやって来ることは夢の通りである。天照大神がわれ

われの仕事を助けようとして下さる」と。そして、此の時、大伴氏の先祖である日臣命ひのおみことは、大軍の監督者として、山を越え路を踏み分けて、鳥の導きのままに、仰ぎ見ながら追いかけて、遂に奈良県の宇陀の下県についた。(中略)そして神武天皇の軍は大和国に侵入し、多くの部族と戦い勝ち進んで、天皇は橿原宮かしはらで即位された。その際に、これまで天皇の味方をしてきた部族は論功行賞を受け、八咫鳥やたからすも功績によって領地をもらった。その子孫が葛野主殿かどのともあがたぬし、賀茂主族の先祖がこれである。』

その一の解説

「天から降りてきた」というのは飛行機もヘリコプターもない時代のことなので、「どこからか知らないがやって来た」と云うことである。この様な云い方は世界の宗教に共通している。とにかく、賀茂の神を始めとして一族は九州の日向の高千穂たかちほから、大和の葛城かつらぎへ行き、岡田の賀茂へ移り、山城の瀬見の小川へ移り、最終的に久我の国こがの北山の麓の賀茂の地の神坂かんさか(現在の上賀茂岡本町 大田神社の東方四百mほどの所)へ到着し、そこで定住したと述べている。

しかし、「賀茂建角身命は日向から神武天皇の東征軍に加わり、その軍の先頭にたつて、軍を大和へ導き、大和の葛城の峰に来た」とい

うのは、全く根拠がないことなので、時の権力者であった大和王権に媚びるためにつけ加えた架空の作り話であるとして、後世の歴史学者たちから否定され続けてきた伝承でんしやうである。

特に肥後和男・井上光貞・岡田精司らの大歴史学者は、歴史的にも考古学的にも根拠がないとして、この伝承を強く否定して、「賀茂主族は太古から山城北部に定住して、勢力を持っていた豪族で、何らかの方法で大和王権と関係を結び、葛野地域を大和王権の直轄領として、その領地を治める県主としての地位を保っていた」と考えた。

つまり、この神話のような話は賀茂主族が大和政権に接触するために勝手に考えたデッチ上げの話であるとの見解で、この説が学会の定説となっていた。

しかし、この説にも合点のいかない点がある。成立直後の大和政権は王権とは言いがたい脆弱な政権で、それと戦争もしないで、大豪族であるこちらから自発的に歩み寄ったとは全く理解できない。学問の世界では以前に偉い先生が言ったために、それが定説となって後の人々が再検討を止めてしまうことが度々ある。

確実な証拠がないから学問の対象となり得ないと云うのであれば、「神武天皇とその一族の東征」の話も全く歴史とは認められないであろう。これも完全な伝承だからである。

しかし、古い「言い伝え」が必ずしも全面的に否定されるべきものではないと云われる。太古の人々の「言い伝え」は現代のそれと違って、「言い伝え」を専門とする人々（語部）がいたので、現代人が考える以上に「云い伝え」に重みがあったからである。少なくとも「葛城に居た賀茂族の一部は、葛城の地から山城の国の岡田の里へと移り、さらに、山代川（木津川）に沿って、葛野川（桂川）との合流点まで移動した。そこから石川の瀬見の小川（賀茂川）を遡って、久我の国の北の山の麓まで到着し、そこ（現在の賀茂）に定着した。」と云う伝承は信用して良いと思われる。現在の葛城山の麓には高鴨神社をはじめとして、賀茂族の神を祀る神社がいくつもあり、岡田の地（加茂町）にも岡田鴨神社、さらに山城（京都）の久我にも久我神社と、賀茂族が移動して滞在したとの言い伝えのある処には、それぞれ神社が作られ現代まで残っているからである。このことは現在、何人かの歴史学者が指摘している。

このように移動を重ねていた山城賀茂族であるが、かれらは政争に負けて移動したのではなく、高度の専門知識を持った職能集団であったので、あちこちから、むしろ招かれて移動したようである。山城への移動は先住民である六人部氏や秦氏に歓迎された結果である。この移動には神武天皇の東征のような激しい戦争は一切ない。

また、賀茂族も全員が一時に移動したのではなく、徐々に移ったのであろう。中には残留した人々もいた筈である。それらの人々により各地に神社が残り、現在まで存続しているのであろう。

賀茂族が得意とした専門は「たたら」による製鉄であったことを多くの歴史学者が指摘している。しかし、製鉄だけではなく、あらゆる鉱物資源の開発であったらしい。奈良県の宇陀町から葛城山にかけての地域はもともと火山帯であったので、鉱物資源が豊富である。鉄はもちろん、朱も水銀も採れたらしい。岡田の里にも木津川の砂鉄があり、さらに賀茂川も彼らの期待に十分応える豊かな川であった。

数十万年前の大昔には今の比叡山と大文字山の間に後世に大比叡と名付けられた大火山があったと地質学者たちは云っている。そして、現在の京都盆地はその火山の侵蝕と崩壊によって深い谷間が埋めつくされてきたらしい。（だから、現在の京都市の地下には琵琶湖に匹敵するほどの大量の水が蓄えられている）。それで、賀茂川もまた、鉄を始めとする鉱物資源の多い川であり、ある支流の谷間では砂金まで採集できた。結局、われわれ賀茂族の御先祖が定着の地として選んだのは、この金属資源の多い賀茂川であった。

毎年五月の葵祭に先立って行われる御阿礼祭で、神をお迎えする丸山の御阿礼所の軒先に「おすず」と呼ばれる飾りが付けられる。

これは藁わらを渦巻きの形に巻いたものであるが、この「おすず」こそ、水草の根元に付く褐鉄の殻を意味し、製鉄部族のシンボルであったと真弓常忠氏は指摘している（真弓常忠「古代の鉄と神々」）。

また、砂鉄を熔とかす「たたら」製鉄では大量の木炭を必要とする。したがって、製鉄集団は同時に製炭集団でもあり、方々の山に入り、木を伐採して炭を焼いた。このため、賀茂族は鉄ばかりではなく、炭も朝廷に供給することとなり、大和朝廷では主殿司とのものつかさの役を受け持つ負名氏おいなとして奉仕した。

その二

さて、再び「山城国風土記」の「逸文」に帰ろう。

『この賀茂建角身命たけつのみみこと たんばは丹波の国（京都府）の神野かみのにいた神伊可古屋日売かむい かこや ひめと結婚して、玉依日子たまより ひこと玉依日売たまより ひめの一男一女を生んだ。この玉依日売が成人して、ある日、石川の瀬見の小川で川遊びをしていた時に、上流から丹塗にぬりの矢が流れてきたので、それを手に取って家に持ち帰り、床の間に飾って置いた。ところがその矢が男に変身して、ついに玉依日売は身みもって（妊娠して）立派な男の子が産まれた。この子が成人した時、祖父である賀茂建角身命は八つの扉かど（たくさんの扉）のある八尋屋やひろや（大きい邸宅）を建て、たくさんの酒を醸造じょうぞうし、多くの

客人である神々を招いて、七日七夜におよぶ大宴会を催した。そこで祖父の賀茂建角身命はその子に向かって「お前が本当に自分の父と思う方に、この酒を注いで上げなさい」と命令した。すると、その子は酒の盃を捧げ持ったまま、天井を突き破り、そのまま天に昇ってしまった。そこで祖父の名に因んで、この子を賀茂別雷わけいかづちのみこと命と名づけた。この子の父、いわゆる丹塗りの矢と云うのは乙訓おとくにの社むこう（向日神社）に祀られている火雷神ほのいかづちのかみである。

また、賀茂建角身命と丹波の神伊可古屋日売と玉依日売の三柱の神は蓼倉たぐくらの里にある三井みいの社に祀られている。またいわく、三身みみの社、三身と云うのは三柱の神をお祀りしているので三身の社と名づけているのだが、今では訛なまって三井の社と呼んでいる。そして、玉依日子かどのとのものがたぬしでく えんそが葛野殿主あがたぬしでく、主族の遠祖えんそであって、子孫であるわれわれ賀茂あがたぬしでく、主族はこれらの神々をお祀りした。』（釈日本紀巻九）

その二の解説

久我こがの国（現在の京都盆地）の北山の麓に定住した建角身命は丹波の国の神野かみのにいた神伊可古屋日売と結婚した。この神野と云う所は現在 兵庫県氷上郡ひかみで、昔から出雲族が多く住んでいた所である。神伊可古屋日売も出雲族であったと思われる。つまり、同じ出雲族である

二人の結婚により山城における賀茂族の存在も確固となったのであろう。

ふたりの間にうまれた女の子、玉依日売命たまよりひめみことは成人してから、その名の通り、神様に仕え、祭りをを行う未婚の女性、忌子いむことなったようである。彼女が瀬見の小川（つまり、賀茂川）で「水遊び」をしていた時、上流から赤く塗った矢が流れてきたと云う。この水遊びと云うのは魚を獲ったりする遊びではなく、「禊みそぎ」であったと云われている。つまり神様を祀るために川に入って身体を清める禊である。そして、その矢を家に持ち帰って床の間に飾っておいたところ、若い男に变身して、彼と彼女は結ばれ、結婚することとなった。ここで朱塗りの矢とされたのは向日神社の祭神であった火雷命ほのいかづちのみことである。また、秦氏はたの伝承である「秦氏本系帳」によれば、火雷神は秦氏の祀る神である。いずれにせよ、この京都盆地に住んでいた最も有力な氏族と緊密な関係を持ったことは間違いない。

玉依日売が産んだ子が成人してからと書いているが、実は三歳ほどの幼子の時らしい。祖父の建角身命は大きい屋敷を立て、大勢の客人を招いて大宴会を催した。その時、祖父の建角身命が幼子に「お前の父と思う人にこの盃でお酒を勧めなさい」と言った。すると幼子は盃を捧げ持って、天井を破り、屋根を破って、天に昇ってしまった。

つまり、急死してしまつたと云う。祖父は自分の名に因んで、幼子に「賀茂別雷神わけいかづちのかみ神（賀茂稚雷神わかいかづちのかみ）」の名を贈った。祖父母も玉依日売も大いに嘆き悲しんだ。

その三

その後のことは「賀茂旧記」と云う書物の中の「年中行事秘抄」に書かれている。現代文に直すと、

『ある夜、天に昇つた御子みこが夢の中に現れた。私に逢いたいと思うなら、天羽衣（あまのはごろも）と天羽裳（あまのはも）を作り、火を焚き、鋒ほこをさげ、また走馬そうまを飾り、奥山の賢木（さかき）を採って阿礼あに立て、いろいろの綵色（いろあや）を垂らし、また、葵楓（あおいかつら）の纒（かづら）を作り、巖おしそかに飾って私を待てば私はすぐに来るだろうと御子は夢の中で語った。そこで祖父母と母は夢の中で言われた通りに、走馬と葵楓の纒を使って、この御子の祭を行い、この縁によって、山本いままに坐す天神の御子を別（稚）雷神と云うのである。』

その三の解説

これが賀茂の地に賀茂別雷神を祀る起源という言い伝えである。幼

子の神を祀る祭主となったのは母の玉依日売であろう。そして、彼女の兄の玉依日子の子孫たちがこの神社を奉斎する一族、つまり、賀茂（県主）族になったといわれている。このような起源で、太古の賀茂族（山城賀茂族）は、この賀茂の地に神を祀る場所を得たのであろう。

太古の祭祀は神山（現在のの上賀茂神社の北方約2kmのところにある標高約四百mの山）の頂上にほど近い巨岩、磐座の前で行われたと云われる。今でも磐座「降臨石」の周辺から、太古の祭祀に使われた勾玉などが出土している。しかし、この斎場は山の頂上近くで、あまりにも不便なため、後世は麓の円山付近に移され、さらに、奈良時代には現在地に祭祀場である拜殿を設けていたと思われる。この拜殿の所が本殿に変化した。つまり、磐座信仰からやがて本殿信仰へ変わった。

これとほぼ同じ頃に蓼倉の地（現在の下鴨蓼倉町）に賀茂建角身命、神伊可古屋日売と玉依日売を祀る神社が設けられ、三身の社と呼ばれていた。それが訛って三井の社となり、現在は三井神社として下鴨神社（賀茂御祖神社）の内にいる。

賀茂族が移動してくる前に、この賀茂の地には、勿論、先住民がいたと思われる。上賀茂神社の東にある大田神社はその一族の神であったと云われる。座田司氏氏によれば、祭神は天鈿女命となつて

いるが、その撰社の神々はすべて朝鮮系の神であるという。この賀茂を含む京都盆地の北部は愛宕郡と呼ばれたが、この愛宕の語源は朝鮮語であると云う（座田司氏「賀茂祭神考」）。この神社の例祭に行われる里神楽はわが国でも最も古い舞であると云う。

また、上賀茂神社内にある第一撰社 片岡社も本社ができる前からの神社であると云われる。古代は「延喜式神名帳」にも書かれた独立した神社であった。現在祀られているのは賀茂別雷神のお母さんである玉依日売命であるが、これは明治四年に国家神道令によって政府に接収されて以来のこと、それ以前は事代主命が祭神であった。この神はまさに出雲の中心の神の一人である。この神ももとは先住民が奉斎していたのであろう。

古代に人類が最初に鉄を入手したのは、空から地上に落下してきた隕石であるといわれる。隕石のほとんどは鉄の塊、つまり隕鉄である。近代になってからも、カナダに住むインディアンたちは氷原に転がっている隕鉄から鉄を採って武器を作っていた。これらの隕石が宇宙空間から地球上に落下してくるときは秒速数十kmの高速で地球大気中に突入するので、空気との摩擦で高温となり閃光と爆音で、いわゆる雷雲からの落雷とほとんど区別がつかない。晴天の霹靂とも言える隕石の落下と雷の区別もつかないまま、落下地点に行つて見る

と、雷と想ったのが鉄の塊であったという経験を古代人は持ったに違いない。雷すなわち鉄と考えて、製鉄業を専門とした古代の氏族は雷神を祀ることが多いと古代史学者は指摘している。

山城賀茂族（賀茂県主族）が初代の祖神として賀茂別（稚）雷神を祀ったのは、賀茂族の本来の仕事がタタラを中心とした製鉄を専門とする職能集団であったからではなからうか。雷は雨をよぶ神で、農業に必要な雨水をもたらす根源だとする考えは、定住して農耕を専業とする弥生時代になってからできた考えではなからうか、

その四

もう一つの古い伝説が書かれた「豊葦原卜定記」と云う本によると、現代文に直して、

『建角身命が諸国を見て回ったのだが、この時、天鈿女命がいて、磐楠船をみずから漕いで、建角身命を神代の浦の波の静かな磯までお送りした。天の磐楠船を漕ぎ寄せて、神が現世にお姿を現されたその場所を御生所（みあれどころ）と呼んでいる。その付近をみあれ野とも船着きの入り江とも云っている。その時の古い歌が残っていて、

やまとかも海にあらしの西吹かば

いずれの浦に御船つながむ

これは五月の賀茂祭の午の日に吟詠されている。』

その四の解説

この伝説の和歌は現代も御阿礼祭の時に吟詠されているが、古い神代のこととはいえ、賀茂に海岸があったなどは、あまりにも荒唐無稽の妄説であるとして、昔から学者たちが強く否定している。現代の上賀茂神社のすぐ北にあるみあれ野に海岸があったなどは全く信じられなかったからである（伴信友）。

しかし、現代になってから、南極大陸やグリーンランドの古い氷床をボーリングして採取された古い昔の氷の分析によると、今から約一万二千年ほど前にウルム氷河期が終わり、地球全体として気温が摂氏十度ほど上昇し、大陸を覆っていた厚い氷の層が融けたという。海水が増え、かつ熱膨張して海面は一挙に百メートル近く上昇した。それまでの氷河期には日本は列島ではなく、アジア大陸につながっていた。日本海は大陸の中の淡水湖だったと古気候学者たちは云っている。ところがその急激な気温上昇と海面上昇によって、日本は大陸と離れ、本州、四国、九州や北海道などの列島となった。さらに気温は上昇して（ピプシサーマル期）、六、七千年前には海岸線

はより一層内陸部へ入り込み、京都では盆地の北の上賀茂や松ヶ崎あたりが海岸であったと云われている。これは縄文海進じようもんかいしんと呼ばれている。

第二次世界大戦後、アメリカ占領軍が上賀茂神社の北側の台地をブルトナーザーを使って削り、ゴルフ場を作ったが、そのとき多数の縄文、弥生の土器が出土して、かつて縄文時代に大規模の集落があったことが判明した。これは縄文人の海岸集落の跡である可能性が高い。従って、古い縄文時代、特にピプシサーマル期には船で賀茂の海岸に到着するようなことがあったに違いない。神様のことはともかく、古い縄文時代に賀茂周辺が海岸であったことの言い伝えが、神話の中に残ったのであろう。

以上がわれわれ賀茂族（山城賀茂族、賀茂原主族）の祖先がこの地へ来て、神を祀り、定住したことの伝承で、古い本に断片的に書かれていた、有史以前の話のすべてである。これらの事実がもしあったとすれば、何時ごろのことであろうか。賀茂建角身命を中心とした一族が葛城を離れて山城方面に向かったのは何時ごろのことであろうか。村井康彦氏は、それは神武天皇の一族が大和へ侵攻したのと同じ頃（西暦二百五十年頃？）と推定している（村井康彦「出雲と大和」）。

また、賀茂の神話について、最も綿密な考証を行なった本は『賀茂社祭神考』（座田司氏著 神道史学会発行 昭和四十七年）であろう。

この頃のいろいろな出来事が、賀茂だけでなく、日本の神話として語り継がれたのであろう。例えば、現代では遠い過去に起こった日食などの天体現象もコンピュータ計算によって詳しく内容を知ることができる。西暦一五四年九月二五日に起こった弥生時代最大の皆既日食は中国地方から近畿地方まで見ることが出来て、七分間ほど続いた黒い太陽は人々を恐怖のどん底へ陥れたと思われる。その恐怖の体験が「天岩戸神話」を作り出したのであろう。

また、「人口学」の専門家たちは、一、三世紀の頃に日本列島の総人口が急激に増加したことを指摘している。その原因は大陸からの移住者が増えたことで、すでに日本は農耕社会になっていたので、賀茂は別として、新参の渡来人と先住の氏族との間でさまざまな軋轢あつれきが生じたことであろう。これもまた、「古事記」のような神話の中で悪い神々の話を作り出す材料になったのであろう。